心に残る映画

『ジョジョ・ラビット』

2019年／アメリカ／タイカ・ワイティティ監督作品

愛国少年とユダヤ人少女

会員　真喜志ちひろ（70期）

『ジョジョ・ラビット』
ディズニープラス スターで配信中
© 2026 20th Century Studios

僕はジョジョ・ベッツラー。憧れのヒトラーユーゲントに入隊して参加したキャンプでは、僕たちアーリア人は他の民族よりも1000倍優秀だと教わった。僕は、キャンプの訓練でウサギの首を折ることができなくて、みんなから「ジョジョ・ラビット」と臆病扱いされて笑われてしまった。

そんな僕をいつも勇気づけてくれるのは、イマジナリーフレンドのアドルフ・ヒトラー。アドルフの言葉を信じて手榴弾の訓練に一番乗りしたけど、跳ね返った弾で顔と足を怪我して、親衛隊に入れなくなってしまった。

僕の家族は、ママとパパ、それにお姉ちゃん。けど今はママと二人きり。ママはいつも明るくて、「愛は最強の力よ」って教えてくれる。二人でダンスをしたり、自転車に乗ったりする時間は僕の宝物だ。僕は靴紐が結べないから、ほどけるたびに、ママがいつも結び直してくれる。

ある日、家の中に隠し扉を見つけたんだ。そこにいたのは、僕らが「怪物」だと教わってきたユダヤ人の女の子、エルサだった。通報したら、エルサを匿っていた優しいママまで捕まってしまう。僕は渋々、彼女を研究することにしたんだ。でも、知れば知るほど、彼女は僕と同じ、普通の人間だった―――

本作の主人公は、ナチズムを純粋に信奉する10歳の少年ジョジョ。舞台は第二次世界大戦下のドイツで、物語はジョジョの視点で進む。ジョジョの妄想の中に現れるヒトラーは、コミカルで親しみやすい存在として描かれるが、それはジョジョが受けている洗脳の深さの裏返しでもある。

ジョジョの目に映る戦時下のドイツは、どこか明るく、のどかですらある。大人たちもユニークで、ファンタジーのような世界だ。しかし、物語の随所で、吊るされた人々や街を覆う悲惨な状況が差し込まれ、戦争がもたらす非情さを突きつけられる。現実は決してファンタジーではない。戦争の影が色濃くなるにつれて、ジョジョが直面する世界は容赦なく重みを増していく。

自宅に匿われていたエルサとの交流を通じて、ジョジョが信じてきた世界観は静かに変化していく。年上のエルサに翻弄されながらも、ジョジョは、「ユダヤ人も自分と同じ人間である」という当たり前で大事な事実に気づいていく。

ジョジョの母を演じるのは、スカーレット・ヨハンソン。父親がいないことを寂しがるジョジョに対し、父親の役を演じてジョジョを笑顔にさせたり、ジョジョの靴紐を幾度となく結んだり、息子への深い慈愛にあふれている。クレンツェンドルフ大尉を演じるのは、サム・ロックウェル。厳格な軍人でありながら、ジョジョを陰ながら見守る温かな存在として物語を支える。ヒトラー役は、タイカ・ワイティティ監督自ら演じ、どこか憎めないキャラクターとして描かれる。

第92回アカデミー賞では作品賞含む6部門にノミネートされ、脚色賞を受賞した本作は、ユーモアの中に戦争の悲劇と人間の尊厳を鮮やかに織り交ぜた感動作である。

最後に、エンドロールの直前に映し出されるライナー・マリア・リルケの詩を引用する。

Let everything happen to you　すべてを経験せよ
Beauty and terror　美も恐怖も
Just keep going　生き続けよ
No feeling is final.　絶望が最後ではない

ぜひ皆さんも、ジョジョと共に笑い、泣き、この物語を全身で受け止めてほしい。